



さっぽろ

郵便振替02710-3-570 あごら社

NO 185	あごら社掲載連絡先	今月通信担当
	細田(011-644-292)	T

今日の内容	
深江誠子さんの本と講演から ... 1.2	フェミニストの「対等」について ... 5
あごらと私 ... 2.3.4	「対等」について ... 6
男と女の会話 ... 4.5	「対等」について ... 7.8

1994.9.1. 発行

通信購読料 1940円(年間)

## フェミニスト 深江誠子さんの本と講演から 高橋 芳恵

8月5日、旭川にて全道母と女性教職員の会・「国際家族年を考える」---女・人権・平和---と題する深江誠子さんのお話を聞いた。

深江さんに関しては13才年下の男と対の関係を持ち38才で始めて子をなしたが、最近、専業市民活動家となり家を顧みなくなった連れ合いと別れた、という週刊誌的知識しかなかった。事前に著書『家族ってなんだろう』を読み、次に講演を聞きそして『女と男の経済学』を読んだ。彼女は俗に言うところの学者・先生ではなく身近な運動仲間の一人という感じだった(・・学者・先生に対して偏見があるな---と自戒しつつ・・)。生活に根づいた自分の目で見、耳で聞き、自分の言葉で話す内容は、聴衆をうなずかせ、しばしば爆笑の渦に巻き込んだ。原発を始めとする様々な地球汚染、PKO、軍隊慰安婦等に対するまだ始まってもない戦後保障、目先の利害関係しか見ない農業つぶし、食の問題、国内にとどまらない東南アジアでの自然破壊など多岐にわたるお話だった。

中でも私の心に残った事のひとは教育の問題。

日本では“対等に”人間と付き合うという教育をしていない。丁寧語で充分間に合うのに尊敬語、謙譲語を教えられ、相手を自分より上か下かによって対応の仕方を教える。大切なのは相手との関係性なのに。また、常に同質を求める教育であるためいつも同年令、同環境の中に居る。ここからは、異なるものから学ぶという姿勢は全く育たない。障害児は障害児学級へ、という事しかり。例えば、東南アジアに駐在しても、相手が自分より遅れている(?)と判断すると歯牙にもかけない。外国へ行っても何も見ず何も学ばないのである。

二つめは、自分は結婚しない、そしてそれは選択できるなら差別する側には立たないと心に決めた事。私もそう思ってきたが子どもが産まれる時に周囲の圧力に屈してしまった。深江さんは「どの子だって親の生き方を背負って産まれてくる。差別されたら



かわいそう、と言うなら、在日朝鮮人や被差別部落の人に子どもを産むな、と言っているのと同じ」と跳ね返している。

素敵な女や男との出合を楽しみつつ、今はしなやかに育つ小6の娘との2人暮らしをenjoyしている深江さんに、心からの拍手を送った。

## 女と男の経済学

暮らしとエロス  
深江誠子



## あざらと私

自分探しの旅日記 vol.2

Yuko.k

昨年、30才という区切りの良い年令を迎えた。ここ10年程、就職・結婚・転職と自分の暮らしを安定させるために、バタバタと忙しい生活を送ってきた。特に昨年は、フランス的の仕事であるため、種類を選ばず与えられるものは何でも引き受けた。収入が増え、交際範囲も広がり、人生をenjoyすることに熱中していた。今年に入り降って来たように転職の話が持ち上がり、勤務先を変えた。この事が契機となり自分の人生を考えた。これからどう生きていくのか——と。10年先の1つの目標に、学んでいくテーマをいぼり込んだのが3月。新しい職場にも慣れた5月頃から重い腰を上げて、興味のある事に意欲的に取り組むことにした。オントナに載った、あざらにまつTEIし、とりあえず会報を送ってもらう。添えてあった手紙の「普段着の手の女たちの思いを語りついでいく場として……無理をしなくて身の丈にあった活動をモットーにのんびりやっています……」という言葉に魅カを感じ、次の編集会議から参加、前号にも書いた例の第1日目に至る。

フェミニズム・ウーマンリブ……何かははまりしないまま、こういう言葉はいつも身近にあったのかもしい。あざらで次々出会う人の名前や顔は、私のスクラップブックの中ではお馴染みだ。なにしろ仕事や生活に追われている間、考える事を先送りしていた私のファイルは、売買春に属するもの、夫婦別姓、セクハラ、女性の生き方……そういった新聞記事の切り抜きで、山のうりに膨れ上がっていたのだから。フェミニズムって何だろう、自分がフェミニストかどうかははまりさせたい。長年のもやもやした思いを晴らすためにあざらとめぐり逢った、そんな気がする。こうして自分の心を素直に書き綴っていくうちに自分自身がどう変化していくのかを見てみたい。これらの思いの影には強い影響を私に与えた母の存在がある。

— ★ — ★ — ★ — ★ — ★ —

母は九才でも1.2を争うローソク向屋の長女として産まれた。第2人はスナナリと東京の大学へに進んだが、女である事を理由に、祖父は進学の夢を認めず、母は泣く泣く花嫁修業の道に入った。20才を過ぎた頃縁談がいくつか持ち上がり、その中で祖父が勧めた相手は、医者であった。結納まで、話ほとんど拍子に運び、おとなしそうな彼の家には、もうすでに母の部屋も用意されていたという。当時、彼女には気に入る男性がいた。東京の親戚で、以前は神主になりたかったという“お公家顔”のその男は、母、父と頂に七くし仕事のために理系の道を選ぶ事をえなかった。その後、演劇で施設を慰問していた活動が誤解を招き red purge にひかかる。東洋社採用のはずが北海道勤務も余儀なくされた。——私の父である。「お父さんの後姿の肩がね、とてみ寂しそうで...」同情で結婚したの「お」ケラケラ笑いながら母はそう言うが、婚約解消で祖父母の怒りを買い、甚当同然に父を追って家を飛び出した母の情熱には驚かされる。



「北海道の自然の厳しさが私を強くした。」今でも自分の歴史を吐き解くとそう語る。雪の多い暖かい土地で、のんびりお嬢様として育った母にとって、石炭ストーブや、冬になると凍って開かなくなる玄関の戸を、“つるはし”で氷を割ってあげないといけない現実、初めて体験する事ばかりで、想像以上だったと思う。強くしたのは腕力ばかりではない。『そ看扱いをする隣人との許いに悩み、反面、厳しい大自然に立ち向かう時の共同意識... 自立への思いはこの頃から生まれたという。九才という土地は相互扶助の意識が強い所であり、私などは「みればそれはおせかいであり、うろたえ感じられる。親子の結びつきも強く、それが由に結婚後も骨肉の争いが絶えない。

33才で2人目の私を出産。祖母に預けながら（その頃もう祖父は他界し長男夫婦と折り合いの悪い祖母は北海道へ来た。）編物講師の資格を取る。地方に住んでいたので札幌や東京での講習会出席は泊まりがけであった。私が物じつくとたくさんの毛糸のそばには『婦人公論』、瀬戸内晴美、有吉佐和子、市川房枝らの書物があったように思う。「女生も経済力を持って自立をしてくれ」「いつまでも親や男性に頼ってはいけません。」その頃からの母の口癖だった。仕事人間の父の不在で何を感じ考えたのだろう。

近隣市町村の文化センターで母が教えるようになったのと、小さなサロンの毛糸店を開いたのは同時期だったと思う。母にとっての編物は、寂しさや苦渋からのがれのためのものから、

仕事へと変わっていった。幼い私はそんな母を尊敬だけの目でただ見る事などで済まず、孤独感やそばにいてくれないもの足りなさ、不満ばかりが心に残っている。当時の我家のモットーは、「自分で考え自分で行動する」。父はその通りうるさい事は何一つ言わなかった。姉は母が働いているため、話す内容も住む所も、いつもスレ違いばかりだった。

私の高校卒業・大学進学と同時に父が定年を迎え、札幌に移り住んだ。しかし、その年の秋、両親はそろって九十九——これからの人生は2人だけで、という理由からだった。その時の母の去り際の言葉は「二ちらにいてあなた達の子供の世話をするだけのオバアちゃんにはなりたくないもの。それに私達がいらない方が自分の事に責任を持つから自立しやすくしよう？」今にして思うと子離れのできている(かった)親だ。でも当時の私にとっては、自分のしたい放題さまで行動し、子供をスト〜ンと突き放した母親に思われた。そんな中、次の年父が亡くなった。(Vol.3に続く)



# 男と女の会話

男たちと会話をすると、以前は肩かこったか、この頃は、右から左へ言葉が素通りして行くようになってきた。何故なのだろう？

生活上、解決を要する切迫した関係にないから、ということもあるか、男と話していて「シメ鳥か、籠んでいや〜」になって(まう)ことか多い。

先日も、非暴力について、男たち3人と話した。2年前、六ヶ所、ウランキャップの時、核燃いらない全国の女たちで一ヶ月テントを張りXDayに不なえて生活を共にし、当日トレーナーの前に、女たちはタイインをした。

その時、女たちのうしろで、組合の男たちが「ワレワレはタカウゾー」とこぶ(をぶり)上げて、シメ鳥ヒコエを叫んでいた。その時のことと青森の牧師さんから「ワレワレはタカウゾーではない！今たかうんた！」と通信していた。彼はトレーナーの下にもぐり込んだ異色のキリスト者である。その時の話したら、組合専従の男性から、「もし、その時、組合員の中から逮捕者が出たら、責任者が困る。逮捕された人の穴埋めの問題もある。個人として参加した場合は自由であるか、その変わり組合は責任ない。」とのことである。私は、今まで

余りにお金のパターンが多過ぎる。そう組織優先型でなく、みんな個人で考  
加していく方向をつくらないのか? という話を付たか、通じなかった。

私は、10人以上の会には入らない。代表者のいる会には入らないでやって  
た。いつか個人としての私で考え行動する。大勢と行動することも勿論あるが、責任  
は自分が負う。男と話しているといつも一般論で、「ホク」かない。ゆさぶられる話とい  
うのが無い。現情命押込み、方針だの……。「悲しい、くやしい、嬉しい、楽しい……etc」  
その他いろいろ自分の中から(ぼり出さないから、面白くない。女たちの運動が楽  
しいのは、「ワタシ」があるから、答が見えやすいし、話は早い。

「ワタシ」を言わないことは、一番の逃げ「た」と思う。いつも一般論を話し、組  
織に決定に(ぼり出さず)いと、顔のない集団は「か」できる。(かし何かかに規  
制されていることって意外、多い。「ワタシ」が逮捕されたら、妻は子、職場は、  
(勿論夫はの 場合もある)。犬や猫は……と。こうやって責任のかけられて、自  
己規制をして、地球はほとんど汚染されていく。女たちが気づけないと、いつの間  
にか男の歯ぐるまにまき込まれてしまう。女の解放の「敵」は男社会ではなくて、  
自己規制する「ワタシ」かもネエー。(百合子)



# 情報



第40回母と女性教職員のつどい

- ・ 9月10日(土) 午前9時30分 全体会 講演:北村小夜さん  
『みんないっしょにくらしたい』  
午後1~4時 分科会  
大谷地小学校(白石区本通り18丁目南1-1  
地下鉄東西線「南郷18丁目」2番出口下車)
- ・ 9月11日(日) 午前10~12時 特別分科会-北村小夜さんを囲ん  
で  
教育会館4階 「雪」

どなたも参加費は無料です。  
託児の用意あります。

連絡先:札幌市母と女性教職員の会  
中央区南3条西12丁目 ☎561-2278(町谷まで)



今年の夏は、とても夏らしい夏でした。(と)

# フェミニストのディープ・エコロジー Step 1

牧師さんに聞いても、お坊さんに聞いても、今がまさに世紀末、末法の世界であると言う。私の理解を起しているので、深刻に悩むことはないが、地球がどうしようもなく病んでいるのは、私にも命がかる。

我が家の草畑にも赤トニホが来々くれるけれど、子供の頃はあつすごかった。身の中にもトニホが止まって感傷したことを憶えている。

エコロジーがブームになって久しいが、私が思うに、もうこの程度のエコロジーは向かない。つまり、ディープなエコロジーにみんなが一歩進んでいく時が来ないかと思う。

ガンジー研究者としても有名なアーン・ネスは、ディープ・エコロジーの開祖として、私たちに新たな世界を展開してくれている。

ディープ・エコロジーという言葉はネスの論文の中で初めて使われた。「The shallow and the deep, longrange ecology movement. A summary」(ロングレンジで見たエコロジームーブメントの浅いものと深いもの大綱)。ネスによれば、エコロジームーブメントの浅いものは、汚染や資源枯渇問題などで目に見える現象にのみ関心と平素とをさす。そういった姿勢の中心は、あくまで、先進国に暮らす人々の健康や豊かさのみをさすことに帰着している。それに対し、ディープ・エコロジーに関わる人たちは、環境の中で人間を特別なものとする考え方を排除し、環境を、人間を含むあらゆる構成要素の相対的割合と見なす。つまり、すべての生命が平等の権利を持つというところから来る。

ディープ・エコロジーの概念を私が説明する事など、とてもできないが、感じていくことはできる。昨年、仙台で、マーガレットのディープ・エコロジーのワークショップに参加した。彼女がしっかりとフェミニストで、私たちの今日的テーマは「核の恐怖」であり、そのために原発や核燃料に立ち向かっていく姿勢を本してくれたことは、とても女性だった。女たちが、自分の名前を男から返してもらうことや、牛乳パックから牛乳を飲むに、さらに、牛乳から乳を搾取することをやめるに至るまで、ディープ・エコロジーのレッスンは身のまわりにヤマとある。それについてであり得て、他と共生する道ってなんなのか。これから、はじめたい。

(百合子)

## 《『呼称』について思うこと》

榊



前号のYUKOさんの原稿を読んでいて、私も、初めてあごらに来たときのことを、思い出していました。その時は、Yさんに「お連れ合いの方はいらっしゃるんですか？」と問われて、「いいえ、私ひとりです。」と答えたのだけど、答えてから、どうやら今の質問は『あなたは結婚していらっしゃるんですか？』の意であるらしいと気付いて…。私は『あなたはここに誰かと一緒に来た（同行した）のですか？』と受取って、『いいえ、私ひとりで来ました。』

と答えたつもりだったのだけど、前者の問いだとしても、私のした返事は『いいえ、私は独身です。』の意になって、それはそれで、間違っているわけではないから、まあいいか、と思ったんだけど…。なんたって、耳慣れない言葉だったんだよね。

私の日常としては、「私の夫」をさす言葉は使う必要がないし、この言葉でひっかかる場面はそう多くはないのだけど（単に人付き合いが少ないせいかな）、会話の中で、あるカップルの夫の方、あるいは妻の方を、敬語を使って言いたいときに、適当な言葉がないことに、けっこう不便を感じている。カップルのうちのどちらかと知り合いなら、その人のお連れ合いという言い方もできるけど、距離が同じだと（どちらとも同じくらい親しい、あるいはどちらも知らない）どうにも説明がたいへんで…。結局、「奥さん」「だんなさん」という言葉を、抵抗を感じながらも使っていることが結構あるような気がする（「主人」には、ばく大な抵抗を感じるのだけど、「だんなさん」も同じ意味なんだよなあ）。

呼称に関して、かつて私自身がこだわっていたのは、むしろ「彼」「彼女」かなあ。すっごくいやだったんだよね、学生時代——恋人やBF、GFの意味で、「彼」「彼女」って使われるの（「彼氏いるの？」とかさあ）。でもあまりにもまわり中の人間が使っているので、いやだとは言えなくって…。なぜいやなのかという理由もはっきりしていなかったし…でも、ただただ、おぞましかったんだよね。

最初の数年間は、自分だけその言葉を使わないようにしていたのだけど、そのうち、「一般の人は、この言葉を聞いても不愉快には思わないんだ。だったら、使ってしまえばいいじゃないか」と思って、使うようにしているうちに、だんだんなれてきて、それほどの不快感も感じずに、「彼」「彼女」を使えるようになっていた。

そんなある日、じゃないけど、2、3年前、ある人と話をしているときに、私が「彼」という言い回しを使ったことについて、その人から非難された。後日の、近況を知らせる手紙の中にも、『いわゆる<彼>である所の人』という言葉を使うのに『貴女の「用語」を拝借』とまで言われてしまって、私は思いっきり頭にきてしまった。私の「用語」だとお？そこまで言ってくれるか、キミはあ…！——その人のことは大好きなんだけど、この件に関しては、いまだに思い出しては頭にきてるんだ。



「彼」という言葉に対して、それまで、意識的に、一生懸命、自分をならしてきたという経緯があったからこそ、あれほどコタエタんだろうなあと思うのだけど、このことについて書こうと思って、昔の手紙をひっぱりだして読んでいて、『彼、であると思ったことは一度もないが』という表現に、ふと感じるところがあった。一般に使われるときの「彼」という言葉の持つイメージと、自分および「彼」に相当する相手との関係に対する、自分の持っているイメージ（理想？）が、妙に、くいちがっている気がする。そして、その一般的なイメージに対して、妙に気に食わない、どころか、おぞましいという感じすら持っているらしい。それに加えて、そのイメージを、自分に対して当てはめられることが、ぞっとするほど不愉快だったんだ（と、今この原稿を打ちながら、考えついた私——やっぱり人の目を意識しながら文章書く作業って、気づけないでいたことに気づけていいかもしれないな）。

でも、「あなた」と同義で「彼女」と呼ばれることに対しても、違和感あったなあ。昔、たまたま隣り合わせた年上の女性が、私との会話の中で「彼女」を連発していて、どうやらそれは、今、面と向かって話をしている私のことをさしているらしい、と途中で気づいたということもあった。…いったいどこの遠くの「彼女」の話をしてるんでしょと思ったぐらい。

話が飛ぶようだけど、「オタク」ってさあ、その名の由来が“彼らは、相手のことを「あなた」と呼ばずに「おたく」と呼ぶ”からというけど、そのことを根拠に、他人と人間的な関係が持たなくて、一步距離を置いているんだとか、人間として未熟なことの証しのように言われてたけど、その非難って変だと思う。

もともと「お宅」という言葉を使っていたのは、大人のおじさん、おばさんなわけでしょ——「お宅はどうなんですか」とか、「お宅のご主人は…」といった使い方が

真っ先に思い浮かぶけど、それはいったいどうなるんでしょう。…日本語って、そういうふうに、直接的に言わないことが“敬語”や“丁寧語”になってたりしてない？

考えてみると「あなた」だって、「山のあなた」の「彼方」でしょ。人を“直接”さす言葉じゃなさそうだよ。

——どうしても、非難したい動機、差別したい動機が先あって、理由はあとからくっつけているような気がしてならない。「事実」って、それだけでは「意味」を持たないんだなって思う。その事実を「解釈」する人間がいて、その人間がその事実の意味を与えて、初めて「事実」って意味を持つんだよね。だから、同じ事実を根拠にして、まったく違う結論を導きだせる。笑えるくらい正反対の結論だって出せるんだから、論理っていったいなんなの？という気にもなっちゃう。

あら、なんか話が散漫になってしまいました。ああ、オチがつかないいい。でももう紙面も尽きたし、時間もないので、このまま出させていただきます。許して。

